Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092（731）2372
FAX 092（731）2373

No.98
2008年12月17日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙絵 「雪になった」（画・甲斐大策）

迫る〝終末〟、今こそ25年の成果を	中村　哲
◎2008年度上半期報告——農村復興事業は最終段階	中村　哲
残務整理の責務を全うしたい	松永貴明
政変の激浪に揺れるペシャワール	藤田千代子
ＰＭＳ基地病院の再編人事を終えて	村井光義
我が子　伊藤 和也へ	伊藤順子
無題	伊藤みさと

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

迫る〝終末〟、今こそ二十五年の成果を

――用水路第三期工事とともに沙漠の開拓村と寺子屋建設に着手

ペシャワール会現地代表・PMS（ペシャワール会医療サービス）病院総院長　中村　哲

戦争・旱魃・冬将軍…それでも人々は明るく

みなさん、お元気でしょうか。日本は師走のただ中で慌しい時期かと思います。こちらも、十二月六日にイーデ・クルバーン（犠牲祭）を控え、ちょっぴり師走の雰囲気を味わえます。アフガン中の家庭で親族が集まり、最大の祝日です。旧約聖書に出てくるイスラエル民族の始祖イブラヒーム（アブラハム）が、最愛の息子イサクを神の命に従って、生贄に捧げようとした故事があります。神は実は彼の忠誠を試したのであって、結局、イサクを捧げることを止めさせ、代わりに羊を屠（ほふ）らせたというものです。

この日ばかりは皆着飾り、年始回りに似た挨拶を交わす行事があり、羊を屠って貧者への施しをします。メッカ巡礼、信心を守る勇者になるのが勧められるのもこの時です。イスラム教徒ではない小生も、御馳走にありつけます。

最近、アフガン全土とパキスタン北西辺境州が無政府状態となり、連日欧米軍の空爆で多数の人々が死に、それに対抗する外国人襲撃が日常化しています。毎回の報告になりますが、これに加えて大旱魃（かんばつ）の進行です。東部で最も豊かな穀倉地帯であったスピンガル山麓は、今やほぼ完全に沙漠化し、鬼気迫るものがあります。農民たちは、やむなく職を求めて町に下りて来ますが、失業者を吸収する程のゆとりがありません。多くの人が出稼ぎ難民として国外（主にパキスタンとイラン）に出たり、報酬を求めて仕方なく国軍や警察に入る者、米軍関係の仕事に就く者、さらには反乱勢力に入る者が後を絶ちません。

追い討ちをかけるのが冬将軍です。ジャララバードにも突然冬がやってきました。十一月二十日、初雪が降りました。ダラエヌールから見上げるケシュマンド山脈が真っ白な雪をいただいています。普段なら人々は、白雪を見て小躍りします。しかし、とどまる所を知らぬ河川の水位の低下、地下水位の下降が、人々の間に絶望的な雰囲気を拡大しています。何かの終末さえ感じさせます。

私たちの作業現場（クズクナール地方）は、今や数少ない残されたオアシス地帯となるに至りました。水路工事を始めた頃さえ、こんなに周囲がひどくなるとは、夢にも思っていなかったのです。二〇〇〇年に始めたP

水位の異常下降により河床が露出したクナール河の取水口

MS飲料水源確保事業、約千五百の井戸のうち、今半分以上が涸れ、農地に至っては、壊滅状態です。この冬をどうやって生き延びるか、人々は必死なのです。

時々日本のニュースが届きますが、遠い遠いお伽の世界のように思えます。

事件だけを羅列すれば、暗いことばかりですが、現地に居れば不思議と、悲壮な気分が湧いてきません。周りが余りに楽天的だからです。空腹を抱えたイード（祝日）であっても、暗い顔がほとんど見られないのです。いや普段よりもいっそう楽しそうに、祝日を迎えます。まるで何事もなかったかのように、羊を売買する市が立ち、貧富や貴賤を問わず、無一物のテント生活者から富豪に至るまで、それぞれの家の事情に応じて準備に余念がありません。

沙漠開墾を射程に第三期工事間もなく開始

肝心の事業の方は、八月の事件以後、日本人ワーカーの退去によって、一時的に大きな影響を受けました。特に、ペシャワールのPMS基地病院は打撃を受けました。しかし、医療関係を除けば、アフガン人職員百数十名、作業員四〇〇名、はつらつと仕事を進めています。

用水路は間もなく第二期工事を終えて、ガンベーリー沙漠横断の第三期工事が始まります。十一月には既に分水路が沙漠の一部を潤し始め、人々は驚喜しました。第三期工事は事実上、農業計画と一体化した開墾事業です。これに備え、沙漠の砂防林の植樹が始まりました。幅百メートル、延々三キロメートルに及んで十五万本が植えられます。マドラサ（伝統的な寺子屋）の建設も、「来春開校」を地域に伝え、イードと共に、「良き知らせ」となりました。ここでは、信心は食物と同じように人々の糧なのです。

今年も目まぐるしい年となり、多くの出来事がありました。詳しくは上半期の年度報告をご覧ください。おそらく、来夏は今年を上回る混乱が予測されますが、事業に時あり、助けるに時あり、今を除いて役に立つ機会はないでありましょう。おそらく今冬がPMSの史上最大規模の挑戦、かつ用水路事業の最終段階となります。

今年の餓死・凍死者は数十万人を超えると噂されています。暗ければこそ明かりを灯し、寒ければこそ暖をとる価値があります。全ての人を助けるのは不可能ですが、せめて目前にある人々の生命を保証し、以て平和の何たるかを証したいと存じます。

日本にあって祈りをあわせ、変わらぬ暖かい関心を抱いてくれる皆さんに、心から感謝します。良いクリスマスとお正月をお迎えください。

平成二十年十二月

ジャララバードにて

中村哲

九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十三年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約六万人（二〇〇七年度）。

◎二〇〇八年度上半期報告
農村復興事業は最終段階
――課題は診療機能の再建

ペシャワール会現地代表　中村　哲

1．医療関係とワーカー派遣

①ＰＭＳ病院（パキスタン・ペシャワール）

七月以来、ペシャワールの治安が急速に悪化。伊藤君の事件（八月二十六日）の前後から、それまで既に北西辺境州全体に蔓延していた反政府諸派の活動が活発化、同時に欧米軍の越境爆撃が激しくなった。病院周辺でも警察に対する襲撃が日常化し、要人と外国人の拉致事件が多発した。郊外は完全に無政府状態で、この状態が続けば北西辺境州全体が内戦の渦に間もなく巻き込まれる。

このため、女性ワーカー二名を九月中に帰国させ、十月末までに、村井、杉山、藤田の三名を残務整理に残して、全員が引き上げた。残る三名も十一月五日までに帰国した。アフガン人職員十三名がジャララバード側へ転出、それまで会計など重要な役を果たしてきたパキスタン人キリスト教徒職員らも三名が辞職、これまでの病院機能は事実上マヒ状態に陥った。

既に管理不可能になっていたラシュト診療所（チトラール）は、九月、正式に閉鎖されて人員を整理、パキスタン州政府のＢＨＵ（マスツジ地方診療所）に譲渡された。

この態勢で残し得るのは、外来機能のみと判断し、現在パキスタン人医師二名、看護士六名、薬局二名、検査二名で、辛うじて外来診療だけが行われている。当面この態勢を続けるが、主力であったアフガン人医療職員が去りつつある現在、質の低下は否めない。

「日本人ワーカーが戻れるまで続けて、いずれ復興」という意見もあろうが、余りに悪条件が重なっている。仮に日本人ぬきで一般診療が続けられても、ハンセン病と類似障害の診療が等閑視されるのは明らかである。そうなると、ペシャワールに林立する一般病院と競合して存在することが、どれほどの意義があるか疑問で、もはや初志が失われる。いずれ思い切った処置が必要とされよう。（次項③参照）

②ダラエヌール診療所

新政府の方針で、家庭出産が通常の農村部で分娩室設置の要請をするなど、無体な要求が多々あったが、何とか折り合いをつけ継続されている。ペシャワールの基地病院にいたアフガン人医療職員の転出で、機能的に強化されることが期待される。

③ハンセン病診療機能の見通し

いずれ建て直しが図られる。ペシャワールは上述のように余りに悪条件が多いので、ジャララバード側で現在準備が進められている。来年の最大懸案のひとつとなる。

2．マルワリード用水路

六月三十日にダラエヌール渓谷で記録的な土石流が発生、同渓谷を横断する主水路を約

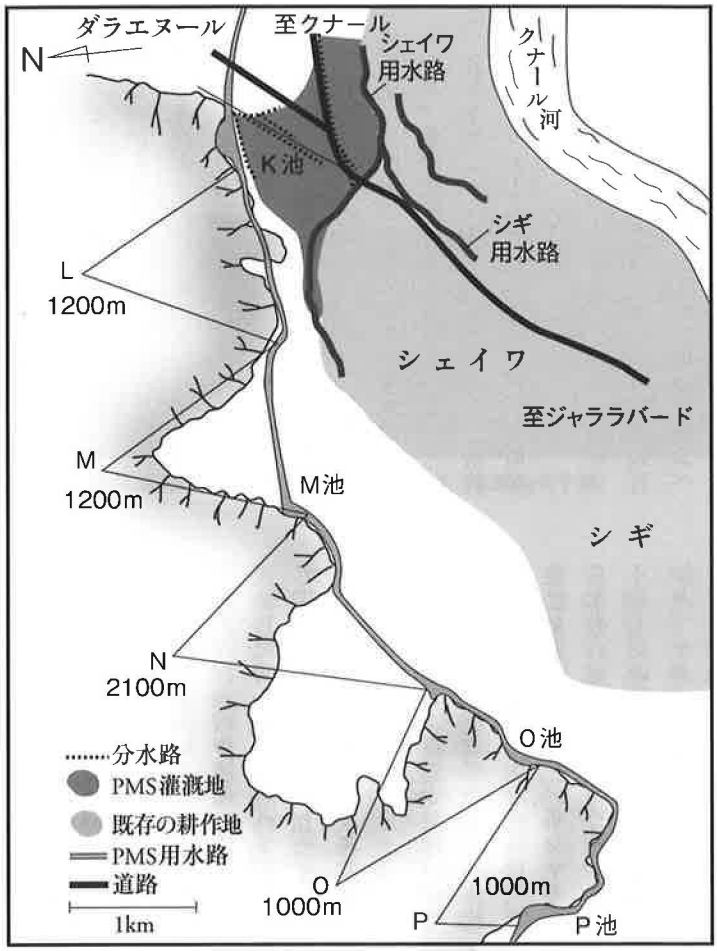
数回の土石流により改修を重ね安定した用水路Ｐ地区

四百メートルにわたって埋めつぶし、百二十メートルのサイフォン管を閉塞、逆流が水路上流内約一キロメートルに及んだ。一時は絶望的と思われたが、盛り土水路の一部を切り崩して排水し、難を避けた。これによって工期が遅れたものの、工事の際に不注意で自然土石流路を閉塞していたことが判明、浚渫作業と共に、抜本的な大改修が二ヶ月をかけて行われた。

また、今夏は局所的な集中豪雨が各所で起き、災害予防対策に重点がおかれた。結論的には、大土石流はサイフォンまたは幅の大きな橋で水路上を通過させ、岩盤沿いの中小規模のものは水路内に取り込むのが最適である。このため、設計を大幅に見直し、貯水池・遊水地を増やし、防災林の造成を各所で行った。中小の土石流路はいったん緩流化して取り込む方式を採用、有効性を確認した。これで長期使用に耐え得るものとなった。

なお、昨年度に築造されたシェイワ取水口と関連河道の回復は、夏の洪水と冬の渇水に耐えうることを確認、同用水路の村々は安定した。ベスード用水路の取水口も二度目の改修を行い、農業用水の安定供給が行われている。

今年の河川の異常低水位は、長老たちも経験したことのないもので、アチン郡、ロダト



第二期工事要図

500～600町歩の田畑を潤すシギ分水路。橋も開通した

郡、ソルフロッド郡、ツァプラハル郡など、かつてアフガン東部で豊かな穀倉地帯をなしていたスピンガル山麓は軒並み沙漠化し、鬼気迫るものがある。

十一月末現在、水路工事の進行状況と成果は以下のとおり。（詳細別表）

① 主水路P区間（取水口から約十九・五キロ地点）が難工事の挙句に十一月中に完成、次いでQ区間（約一キロ）が十二月中に完成予定。Q区間は実際には大貯水池の連続となり、集中豪雨対策を兼ねている。

② K分水路（シェイワ第二分水路）：計約一・八キロが七月初旬に完成、約六百町歩が回復した。

③ O分水路（シギ分水路）：約一・六キロが十一月二十日に完成、推定約五百～六百町歩が新たに灌漑に浴する。同地はガンベーリー沙漠の末端に当たり、シギ村の生産力は倍増する。更に分水路延長が進められている。

④ マルワリード用水路の取水口改修：最終工事から二年を経て安定しているが、将来予測される異常低水位に備え、十一月十五日から十二月二日まで最後の改修工事を終えた。

⑤ 第三期工事のガンベーリー沙漠横断水路は、十月最終測量を完了、ルートを決定した。〇八年十二月から着工する。主水路の長さ二・八キロ、分水路を張り巡らせて千数百町歩の開墾を可能とする。（詳細別表）

3. 農業

十二月に農業計画はいったん中断予定であったが、担当の伊藤和也氏が八月二十六日に武装した四人組に襲われて死亡、予定を早めて関係者を帰国させ、十一月十五日を以て五年半続いたダラエヌール農業試験場を閉鎖した。

次に述べる「自立定着村」が今後、PMSの農業事業と灌漑事業とを一体化して継続される。これまでの主な成果は、茶の栽培の可能性を実証したこと、サツマイモの普及事業、日本米の導入による収量の増加、簡単なサイレージの普及や燕麦による冬の飼料増産の試み、ソルゴーやアルファルファの普及など、多岐にわたる。

4. 自立定着村

来春にも潅水が可能となるガンベーリー砂漠地帯での開拓事業である。これによって灌漑・農業事業を事実上統合し、かつ最後の仕上げとなる。また用水路の維持・補修は、世代から世代へと受け継がれるもので、きわめて長期のケアを要する。訓練された作業員や職員を定住させ、一種の職能集団を置かねば二十数キロに及ぶ水路保全は不可能だと思える。

15万本の苗木植林が始まった砂防林造成地

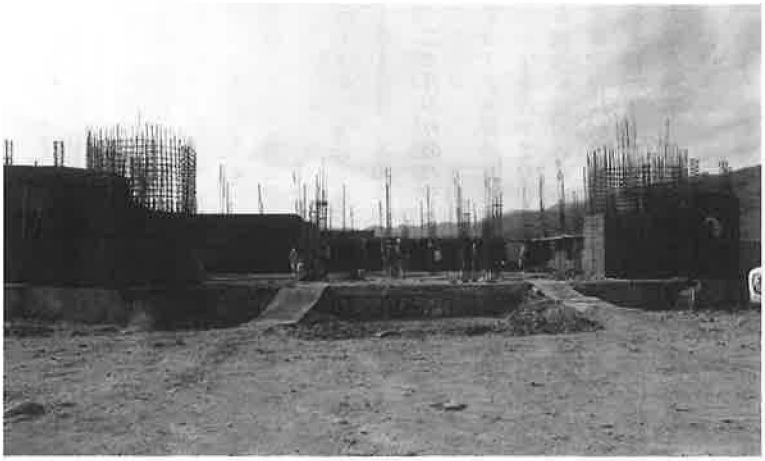
二〇〇三年に始まった用水路建設・農業事業の最終的な段階であり、二十五年の総仕上げだと考えてもよい。

① 〇八年十一月までに約三百五十町歩の農業予定地を確保、現在境界をめぐらし、職員を優先して開拓農家をPMS内部で募っている。

② 十一月三十日、二百所帯（約二千人）の居住区（T地区：Q地区末端より二・八キロ地点、取水口から二十三・三キロ地点）

を決定、隔壁の工事が開始された。

③　砂防林なしにガンベーリー沙漠の開拓はできない。そこで、現地固有種のガズ、ユーカリなど、乾燥に強い高木を約十五万本、幅五十～百メートル、長さ二・五キロにわたって植樹する。七月から育苗を始めて準備、十一月三十日、植樹が開始された。



2009年3月完成予定のマドラサ（伝統的寺子屋）

5. その他

①　マドラサ（寺子屋）建設：再々会報で述べてきたように、アフガン農村共同体はマドラサなしに成り立たない。建設中のマドラサは、併設のモスクで六百人以上の礼拝ができ、学校で六百名の学童たちが学べる。地域のもめごとの解決にも不可欠で、人口が急増したクズクナール全域を束ねる地域の中心となる。

本格的な工事は三月に始まったが、九月までに基礎及び床面工事を完了、十月から壁面工事が急速に進んでいる。天井の仕上げが十二月に始まり、来年一月から内装の段階に入る。二〇〇九年三月に開校する。これによって、ジャララバードにあふれる孤児たちや極貧の家庭の子弟たちにも、教育の機会が与えられることになる。

②　帰国した日本人ワーカーのうち、松永が十一月二十五日ジャララバードに戻り、会計・事務作業の整理に当たっている。

③　クナール河の対岸も渇水が深刻である。特にジャララバード近郊でベスード郡に並んで大きなカマ地域（約四千町歩）は、冬小麦の生育が絶望的だと見られている。今のところPMSは静観しているが、他団体やアフガン政府の動きがなければ直ちに取水口の緊急補修にのりだす予定である。

第三期工事概要

場所；アフガニスタン国ニングラハル州シギ地方・ガンベーリー沙漠
工期；2008年12月～2009年6月
工事区間の長さ；2.8キロメートル
工事区間の名称；S区間（1.5キロメートル）、T区間（1.3キロメートル）
流量；最大毎秒2.5トン（1日約20万トン）
受益面積；約1500町歩
用水路の工種；蛇篭工、柳枝工（水路沿い挿し木、約2万本）
工事の内容；

1．主水路；2.8キロメートル
2．予定分水路；10ヶ所、計10キロメートル
3．PMS開墾地の整地作業（面積；350歩）
4．農作業員の簡易宿泊施設（150所帯）
5．コンクリート構造物；サイフォン（20メートル）×1、橋×5
6．樹林帯（防風・防砂林）；ユーカリ、ガズ、ビエラ　幅50メートル、長さ2.5キロメートル、約15万本*

*ガズは、アフガニスタンの乾燥地で植林されるマツに似た高木。ビエラは乾燥に強い低木で荒地に自生するもの。

◎ワーカー通信

残務整理の責務を全うしたい

灌漑用水路事務担当　松永貴明

二ヶ月ぶりのパシュトゥ語

カーブル空港はセキュリティのためなのか、チケットを持ってないアフガン人は到着ロビーのある建物に近づけない。だから、迎えに来てくれたスタッフに会うためには、三十キロ以上の重い荷物を持って、えっちらほっちら数百メートル離れた駐車場エリアまで歩いて行かなければならなかった。

へとへとになりながら駐車場に近づいてくると、通行人の検問（外から空港施設に入ってくる人だけが対象）をやっている場所に人だかりが見えてきた。人だかりのなかで背の高い見覚えのある顔が手を振っているのを確認。ジャララバード事務所のサブールだ。検問の脇を通り過ぎると、向こうからも近づいてきた。事務所の守衛長マショック、生意気な若いドライバーのザイヌラもいた。抱擁と握手を交わし、

「アッサラーム・アレイクム、サンガイェ、ハイェ、ジョーリイェ、タクライェ」

とパシュトゥ語で挨拶を交わした。

ちょうど三つあった荷物をその三人が一つずつ強奪してくれたおかげで、手ぶらになり楽になった。車の方へ歩きながら、彼らが話しかけてくる

「日本はどうだった。ご両親は。兄弟は。友達は……」

休暇から戻るといつもみんながみんな同じことを言ってくる。この二ヶ月間も休暇だと思っていたのかも。

「ジャララバードはどうだ。寒くないか。仕事はうまくいってるか。問題はないか……」

私も負けじとパシュトゥ語で応酬する。ふと気づく。意外とすんなりパシュトゥ語が口から出てきた。二ヶ月間も使ってなかった言葉なのに。

たまりにたまった会計作業

ジャララバードへは国際赤十字の飛行機に乗って移動。宿舎に着くと、守衛のママ・ジャンが、おおー、と感嘆の声を発しながら抱擁してくる。握手、挨拶に続いて、またもや

「日本はどうだった。ご両親は。兄弟は。友達は……」

ホントにみんな同じことを言ってくる。百人近いスタッフと再会すれば、百回同じことの繰り返し。中には、腰はどうだ良くなったか、と持病の腰痛について心配してくれる者もあれば、日本で結婚してこなかったのか、と余計なことを言う奴もいるし、チャクニ（香菜とヨーグルトの和え物。松永さんの好物）が来た、とわけのわからんことを言って喜んでいる奴もいた。ああ、これがアフガニスタンなんだ、自分は戻って来たんだ、としみじみと思った。

着いた翌日から、さっそく仕事を開始。たまりにたまった約三ヶ月分の会計データとにらめっこ。十分な引き継ぎができていなかったので、仕方ないと言えばそうだけど、引き上げ時に感じた不安が的中。大きなミスはないものの、小さなミスがたっぷり。まあ、これもアフガニスタンか。

イード休みも返上

ジャララバードに戻ってきて一週間が経ち、調子が乗ってきたところに、明後日からイード休みが約一週間だという。たまりにたまった仕事があるので、そのまま宿舎で仕事を続けると思う。休みが明けると現場では再び突貫工事が始まるようだ。その前に、精をつけてもらおうと羊を二頭買って、カバブをやろうかと企画中だ。

今年は悲しいことがあった。あのとき、撤退したワーカーたちは日本でそれぞれの道を歩み始めていると聞く。自分はここに戻って来るしか能がなかった。いつまで、ここに留まれるかはわからない。だから、できるだけのことを、できうる限りやっていくつもりだ。それがアフガン人スタッフや住民に対する責任だと思う。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

政変の激浪に揺れるペシャワール

ＰＭＳ看護部長・院長代理　藤田千代子

急速に悪化したペシャワールの治安

ペシャワールから帰国して一ヶ月が過ぎようとしている。

ここ数年、病院の進退について数回方針が変わる中、最終的に今年七月国際ＮＧＯへの登録が決まり、九月中旬には病院でパキスタンと日本との合同理事会を持ち、登録手続きが始められる予定だった。今こうして日本でこのようなことを書いていても、それがたった数ヶ月前のことだったとは思えない。それ程にパキスタンの治安情勢の悪化は激しさを増していた。

数ヶ月前、米国の圧迫により強行されたと言われている、パキスタン軍による自治区の武装勢力（アフガニスタン内でアメリカ軍やＮＡＴＯ軍を攻撃している武装勢力がペシャワール近郊の自治区にいるとされている）の掃討作戦は誰もが認めるように、形ばかりのものだった。私達の病院がある北西辺境州、それもペシャワールのすぐ隣の地区で戦闘が始まったと報道されていたが、病院の近くのペシャワール空港での戦闘機の離着陸は殆どなく（二〇〇一年米国によるアフガニスタン攻撃時は離着陸時私達の宿舎の窓がしばしば振動しその音を不吉な思いで聞いていた）、病院の誰もが、これは政府が取りあえず米国の要求を満たす為に行った、形だけの戦闘だと言っていた。かつて軍人だった病院のイクラムラ事務長は「軍隊が同胞に対して爆撃するのではどうしても士気があがらないだろう」とも言っていた。

しかし九月、大統領交代の前後から北西辺境州の中でも特にスワット地区、バジョワール地区では国内避難民が数十万人出るという本格的な戦闘になっていった。私達が帰国する前は、ペシャワールにあるカッチャガレイ・アフガン難民キャンプ跡地（アフガン難民が立ち退いた直後にブルドーザーで潰された広大な更地）にも新たな国内避難民がテント生活を強いられていた。スワットのミンゴーラ近くから来ている病院の職員がいるが、彼も家族を避難させた。現地の新聞によると米国による辺境地での戦闘訓練支援計画で米軍人が数十名実際に戦闘に入って訓練しているとのこと。

自治区での政府軍の攻撃が激しくなるに比例して反政府軍の活動もまた活発になり、警察や官僚、政府関連の建物などが次々と襲撃されるようになった。私達の身辺もだんだん騒がしくなって来た。病院のすぐ前にある警察のチェックポストに詰めていたポリスが一名殺害され、残ったポリスが病院に避難して来た。翌日警察から夜間だけ院内にいさせて欲しい、また病院ゲート横の二階の職員宿舎ベランダに警察の夜勤者を詰めさせたいとの要求が来たが、病院職員や患者が巻き込まれることを避け断った。夜間は殆ど毎日、病院周辺では撃ち合いがあった。

治安当局より、外国人の安全を確保することが難しいので、病院内に日本人は居住しないようにとの厳しい達しがあり、ワーカー七名が病院から車で二十分くらいの所にある宿舎で一緒に生活するようになった。そうなると今度は日本人七名固まっての通勤が心配になり、病院の近くのもっと安全な所へと引っ越す必要があった。九月、宿舎の移転を済ませた翌日、私達の元の宿舎からの通勤路上でアフガン大使が誘拐され、ドライバーがその場で射殺されるという事件が起きた。治安当局からは病院や宿舎からの外出時は護衛をつけるので、その度に警察へ連絡するようにとの達しも来た。数回護衛を付けたがこれではかえって外国人であることを周りに知らしめている感もあり、私達に同行する現地職員をも危険な状態に巻き込むのではないかと懸念された。

女性患者の治療をする藤田看護部長（ＰＭＳ基地病院）

回診中のジア副院長（右端。ＰＭＳ基地病院）

患者とスタッフの行く末

このようにパキスタンの治安は悪化するばかりで改善の兆しは全くない状態となり、病院の日本人ワーカーの全員引き上げの決定が下された。

十月初旬の断食明けのイード祭後、中村先生より病院の全職員へ、治安悪化による十月中の日本人ワーカー全員の引き上げ、それによる病院機能の縮小が説明された。

病院はイード明けより外来診療のみとなり、ハンセン病患者の受け入れ体制を残し、その他疾患の入院機能はなくなった。しかしこれまでＰＭＳでケアして来た、ハンセン病に類似する神経障害による手足の創傷をもつ患者は手当に来るので、むげに断るわけにも行かず、入院治療を続行した。

病院機能縮小＝外来患者のみの診療になるので午後から仕事のない職員が出た。余剰人員の調整は大きな懸念であった。もちろん、職員の誰もが日本人ワーカーのいなくなった後の病院の体制を考えただろう。それによる不安を隠さない職員もいた。中でもキリスト教徒である職員が日本人職員がいる間に退職したいと申し出、アフガン人職員で退職又はジャララバードへの異動を申し出る者もいた。アフガン人達の頼りとする副院長であるアフガン人ジア医師が七月よりジャララバード事務所の仕事に張りつけになっており、病院勤務が殆ど不可能な状態が続いていて、更に私達が居なくなった後、パキスタン人による運営体制に不安感を募らせていた。現在のように州や国の治安が悪化し、更に経済破たん状態になると、一般の人達の怒りが彼ら少数派のキリスト教徒やアフガン人達に向けられることが容易に想像できた。これがもし日本で自分の身の回りで起きたとしたら、私はどのように行動するだろうかと考えたりした。家族を食べさせるため精一杯の生活をしているところに、隣国からの難民がいる。隣国では旱魃で作物が取れない、更に戦争がある。こんな時私達はどのように行動するだろうか。

一回、二回と職員調整で退職を申し渡す度に、当人はもちろん他の職員達の表情は固くなっていく。今回の縮小で退職せざるを得ない職員に関しては数ヶ月の生活は必ず保障するとの約束通り、勤務年数により二ヶ月から最長は六ヶ月分の退職金支払いを実行した。更に通常の退職時にそれまでの勤務態度などによって支給の有無、支給割合が決められる病院からの積立金も全退職者に支給した。こんな日々の中救われる思いがしたのは、これらの退職金で、ある者は小さな雑貨店の開業準備を早速すすめ、病院で洗濯の仕事をしていた者は家族が持っている洗濯店の拡張を計画していたことなどである。

退職、異動を合わせると総勢二十七名が病院を去った。

副院長のジア医師が不在なので大急ぎでイクラムラ事務長に運営を引き継ぎ、薬品の準備もしっかり出来ていない状態で帰国したが、外来患者の診療は何とか滞りなく維持している様子である。

パキスタンもアフガニスタンも、経済的な事情から医療を受けられない人達が大勢いることは以前と変わらない。その中で、両国がこれからどうなって行くのかを思うと気が重くなるが、ここ数年のパキスタンに絶望感を募らせているイクラムラ事務長と「それでも希望を持って祈りながら様子を見よう」と毎日、毎日話して来た。

日本各地で、現地で働く私達ワーカーの安全を祈ってくださった多くの方々に、感謝の気持ちを伝えたい。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

PMS基地病院の再編人事を終えて

PMS基地病院会計担当　村井光義

現地人スタッフが直面した雇用問題

十月六日午後、中村先生は全職員に治安悪化のため日本人ワーカー全員の無期限一時帰国を伝えられた。そして今後職員数名の解雇が生ずること、見通しのつかない病院の行く末のため、辞職を希望する職員は各部署の責任者に伝えるようにとも話された。いずれの場合も退職時には数カ月分の補償を約束された。これは日本人不在に加え、主にジャララバード事務所業務の立て直しをする副院長ジア先生のジャララバード異動、過去一年間学校に通い看護士助手、薬剤士助手の資格を取得する職員四名のフルタイム就業復帰により、職員一人あたりの仕事量が減るためだ。最後に、今後も今までと同じように患者のために働くことを厳命され、中村先生自身は残り、PMSは現地ペシャワールに存在意義がある限り活動を続けることを約束された。

七日以降、何度か会計職員二人は日本人帰国後の不安を私に伝えた。もし理不尽な事態が起きたとき、日本人が去れば誰も彼らを守ってくれないという。お金を扱う部署は只でさえ他の人から好まれないのに、まして彼らはパキスタンで少数派のキリスト教徒である。今までも注意した時や、彼らにとって不都合な病院の決定に際し、「どうせ僕たちは…」と事実に沿わない理由を言い弱い面を見せていた。イスラム教徒はキリスト教徒を蔑ろにしているわけではないが、どんな場所でも互いに共通のものがあるとやはり心を通わしやすい。その点では、少数派の弱い立場というものが確実にあるようだ。パキスタンではキリスト教徒はコミュニティーを作り助け合って暮らしている。仕事に対しては堅実である。事務職員は患者と直に接する機会が少ないため、自分の仕事が一体何に役立っているのか不安になることも多々あっただろうが、過去十年間、日本人会計責任者が三名替わるなか、主に給料作り、会計報告、市場調査を続け、患者のために働いてきた。そして十六日、彼らは辞職の意を私に伝えた。PMSで働くことによって給料をもらい家族を養う彼らに、日本から守り続けるなど軽々しく言えない。

十四名が辞職、十三名が異動

日本人の現場での役割は、彼らが自信を持てない考えや思いの背中を押すこと、現地と日本の方法をうまく融合させ、より現場に合った方法を一緒に編み出すこと、寄付していただいたお金を現地で最大限に活かすことなどと思っていた。様々な民族、宗教、あるいは国籍がある中で、生活基盤がここにないことは彼らの身に成りきれない、彼らを心底理解し得ない欠点と思っていたが、今回唯いるだけで緩衝材のような存在になり得るという良い点があることを知った。

最終的に職員十四名の解雇または辞職、アフガン人職員十三名のジャララバード異動となった。退職時の給料や異動に関する混乱は全くなく粛々とすすんだ。ある職員は明日からの不安、心配を抱えているにも拘わらず、「ありがとう」と言ってくれた。現地の人々、現地職員に対し真摯であり続けたことが理解に繋がったのだろうか。

会計については、予期される食糧など必需品を半年分ほど買いため、数カ月分の給料を準備した上で看護士二人とイクラムラ事務長に業務を引き継いだ。急造ではあったが、先日十一月分の会計報告書を受信、今のところ給料や支出に対する支払に問題はないと明るい声で連絡を受けた。張り切っていることは嬉しいが、緩衝材のない今気がかりなのは職員同士の摩擦だ。

帰国後、日本に在る流れと、あまりにも少ない現地情報のため、みんなの感情、状況を容易に知ることができず辛いが、今はPMSを離れた職員をはじめ、パキスタン、アフガニスタンに暮らす人々が家族と平穏な日々を送れることを祈り、日本で自分のできるかたちで支援していきたい。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

我が子　伊藤和也へ

母　伊藤　順子より

和也へ手紙なんて書いたことありませんでしたが、最初で最後の手紙を書きます。我慢して読んでください。

母はいつも言っています。テレビ・新聞等で報道されている青年は、ペシャワールの農業指導員の伊藤和也さんで、私の息子伊藤和也ではないような気がしますと。

五年前、いきなり「アフガニスタンに行ってくる。どんな処か何をするのか知りたければこの本を読めばいい」と中村先生の本を差し出しましたね。何を言っているのか、どうなるのか、理解する間もなく二週間後に出発してしまいました。私と和也の会話は細かいことは無し。いつも結論だけだったような気もします。ごちゃごちゃお母さんに言われるのがいやだったんだよね。さんざん子供の頃に言われ続けたからね。

最初にかかってきた電話で「何を食べているの。おなかをすかせていないか。病気はしないか。」等。今思うと随分失礼なこと聞きました。和也は「お母さん　お母さんが想像するような貧しい国ではないよ。この国には多勢の人たちが生活している。ちゃんと食べているし、みんなが食べるものは自分も食べる事ができる。そんな失礼な考え捨ててくれ」と。この時から和也の事は心配しない様にしました。

帰ってきても、父も母も仕事に追われていましたので、ゆっくり話も出来ませんでしたね。ただ覚えているのは、「孫の顔は見れるのか」と聞いたとき「そんな平凡な生活は考えていない。みさと、佑介に頼んでくれ。もしものことがあればこの身体をアフガニスタンに埋めてもらうから」と。

「冗談じゃない。おまえは日本人。なにがあっても我家に戻ってこなければだめだ。そんなことになったらおかあさんはアフガニスタンに行き、掘り返してでも、引きずってでもつれてくる」。きっと和也はこの事を覚えていて、山の中で一人置き去りにされた時、「自分はこのままアフガンの土になってもいいけれど、あの母のこと。大騒ぎして連れ戻しにくるだろうから、みんなに迷惑がかかるので、どうか　早く見つけて母の元にこの身体届けてください」と村人にお願いしてくれたんだよね。

よく和也・みさと・佑介三人の誕生日に母が手作りケーキを作りましたね。泡だて器で一生懸命卵白を泡だて、まだ電子レンジが無かったので鍋でスポンジを焼きました。うまくスポンジが膨らむ時もあれば、失敗して硬いスポンジになってしまう時もありました。でも家族八人で大騒ぎしながら、ローソクに火をつけ、火を消し、伊藤家に生まれて来てくれて有難う、健康で元気に育ってくれて有難うってお祝いしました。じきに和也の誕生日十一月十九日が来ます。でも伊藤和也さんはいつまでたっても享年三十一歳ですって。享年てなんだ。なんで享年なんて付くんだ。我が子伊藤和也は今年は三十二歳になり、来年は三十三歳になります。母の命ある限り和也も母も歳を重ねていきます。今年の誕生日には、久しぶりにケーキを作ってやれとみさとと佑介に言われました。和也が食べてくれれば、どんなに忙しくても、どんなに疲れていても作ります。でもただお供えするだけのケーキを作るのかと思うと。

この間、ワーカーの皆さんが訪ねてきてくれました。彼たちが家に入ってきたとたんアフガニスタンの匂いがしました。いつも和也が帰ってきた時と同じ匂いが。本当なら和也もと思うと涙が止まりませんでした。少し恥ずかしそうにうつむきかげんに話す彼らに「無事でいてくれてよかった。これからも元気で幸せになってください」と願わずにはいられませんでした。

和也の事件を中学校の社会の時間や道徳の時間に取り上げてくれたそうです。中には感想を書いて送ってくれた学校もありました。今度の事でお母さんを常に守ってくれた方が「お母さん、和也くんはアフガニスタンには子供たちが食べ物に困らないように種を蒔いたけれど、日本の子供達には、豊かな国に育った自分に何が出来るか、何をしたらいいか、そんな事を考える事も大事だよと心に種を蒔いたね」と言われました。そんな事言われたら照れるよね。和也そんな大それたこと考えていないよね。でも子供達が将来ひとりでも花を咲かせてくれたらうれしいね。子供のころは宿題の作文ひとつ書くことを嫌っていたよね。でもペシャワール会の志望動機の文章はすばらしいよ。初めて誉めてやります。

あんまりごちゃごちゃ書くとうるさいって怒られそうですので、最後にします。

和也は父と母が結婚してすぐに授かりました。母はまだ母になる準備が出来ていませんでした。自分がまだ子供でしたので、随分和也も周りの家族も大変だったと思います。それから寝ぐずをとても言う子でした。眠くなると昼でも夜でも大泣きをします。そうなると大変。夜中に父の運転で母がお前をだっこし、深夜ドライブを毎日の様にしました。でも年子のみさとが産まれると不思議と治りました。兄となったことがわかったんでしょうね。佑介が産まれると「男の子だ。弟が出来た」と喜び一層お兄さんらしくなりましたね。

伊藤の家でも袴田の家でも初孫でしたので本当にみんなにかわいがられました。おじいちゃんはいつも和也を一輪車に乗せて、おばあちゃんが用意してくれたお菓子と飲み物をもって畑に連れて行ってくれましたよね。でも和也の事を一番かわいがり理解していたのは父だと思います。男の子が生まれたと職場で聞いて、急いで病院に顔を見にきたことを思い出しました。そんな父親に「りっぱな子供。我が家の誇りだ」なんていってもらえるなんて、和也　幸せですね。うらやましいです。こんな事があって、父の酒量が増えました。身体と心が心配です。和也から少しお酒を控えるよう言ってください。

ではいつものように言うからね

元気でね
身体に気をつけてね
今度はいつ帰れるの
おかあさんのいる時電話してよ
いってらっしゃい

追伸
このごろ佑介のこと「和也　和也」と呼んで「また間違えてる」と笑いながら怒られます
和也　和也　平和なり　和なり　名前のようにあなたは育ちましたね
返事をしてくれない笑顔のあなたに
母の命がある限り　和也　和也　と呼びかけます

試験農場で収穫したサツマイモを手にする子供たち
（撮影・伊藤和也氏）

無題

伊藤　みさと

八月二十六日、十四時。会社に母親からの電話がきた。「みいちゃん落ち着いて聞いてね、お兄ちゃんが誘拐された」。あの日から私はまだ一歩も動けずにいます。

両親が共働きでいつも忙しくしていたけど「お兄ちゃん」が産まれた時から一緒だったので私が一人ぼっちで寂しい思いをすることは一度もありませんでした。一番古い記憶は佑介が産まれるときのこと。兄は弟が欲しい、私は妹が欲しいと言って喧嘩をして、男の子だとわかったときは本当に嬉しそうでした。偏食がひどかった子供の頃は食事の時間が大嫌いでした。食べ物を残すと父親に怒られるので「お兄ちゃんこれ食べて」とこっそり渡して、だからたまに風邪などひいて食卓に兄がいないと私のお皿は山盛りのまま。唯一天敵の白アスパラ以外は何でも食べてくれました。小学校に入ってからは毎週土曜日スイミングスクールに通いました。たまに二人でサボったときは母親にバレないように家の洗面所で水着とタオルを濡らして、だいたいズルイことを考えつくのは妹。兄一人だったら何の工作もしないで母親に怒られてもヒョウヒョウとしていたでしょう。お兄ちゃんはやっぱり「お兄ちゃん」で、二段ベッドの場所取りも、お菓子を選ぶのも下の私達に譲ってくれていました。両親が出かけてしまって兄弟三人で留守番をした夜に「キョンシー」をテレビで見て、恐くなって三人でくっついていたら急に京都で買ってきた木刀を持ってきて「もしキョンシーが来てもこれで戦うから大丈夫」と言って安心させてくれました。

高校を卒業してからはお互い一人暮らしを始めて顔を会わすことも少なくなりました。何年かしてまた一緒に生活を始めたと思ったら、ある日突然近所にでも遊びに行くような口ぶりで「アフガニスタンに行って来る」と言って出かけていきました。アフガニスタンに何をしに行くのか、どういう国なのか、私には全くわかりませんでした。ただ一つだけ「危ない場所」という認識だったので初めて帰国した時は嬉しくて、嬉しくてはしゃぎ回りました。大きなスーツケースいっぱいにお土産を買ってきてくれて、色鮮やかな布やブルカという女性用の衣装、初めて見るものばかりで母親と交互に着てみては写真を撮りました。兄が撮ってくる何百枚という写真を見て、一面茶色の景色に少し驚きましたが現地の人々がやさしい笑顔をしていたので少し安心しました。テレビでアフガニスタンのニュースをやっていても怖くて見る事が出来ずいつも目をそらしていました。兄も家族が心配するような話は一切しなかったので、私はいつの間にか兄がアフガニスタンにいることに慣れ、兄弟の中でも一番頑丈で、生きる力の強い兄に安心しきっていたような気がします。

あまりに突然でした。

八月二十七日。昨日から全く眠る事が出来ず、不安と焦りで疲れ果て少し横になろうかとした時、中村先生から電話がきました。淡々と静かに相槌をうっていた父親が一度だけ驚いたような声を出しました。嫌な予感がして側にいる事が出来ず隣の部屋に逃げました。

とても長い会話でした。電話が終わるのがわかって恐る恐る父親に近づきました。

「みいちゃん　お兄ちゃんだめだった」

今回のことでたくさんの方に助けて頂いて心から感謝しています。毎日毎日いろんな感情が湧いてきて何もかも嫌になることもあります。でもそんな中でも変わらずにある二つの信念。「両親より絶対に長生きすること」「弟と何十年先になるかわからないけど必ずアフガニスタンの地を訪れること」。今の私

の精一杯です。私は私の家族が大好きで、お兄ちゃんが大好きで、だからあまりにも現地の人や子供達に親しまれていた話ばかりを聞いて少しやきもちを妬きました。そんな時、現地にいたワーカーの方が家に来て「妹さんの話もしていましたよ」と声をかけてくださった時は本当に嬉しかったです。最悪の一週間、誰もが限界を超えていて大好きな家族がバラバラになってしまうのではないかと不安でした。いくつかの新聞で父親が気丈に対応して立派だったと載っていましたが、記者の前だけでなく家族の前でも和也を守る為、家族を守る為父親は気丈でした。誰よりも苦しくて辛くて大声で泣きたかったはずです。有難い事に私には私のことを一番に理解してくれる弟がいます。その弟と一緒にこれから両親のことをしっかり支えていきたいと思います。

お父さん、お母さん　三人兄弟に産んでくれてありがとうね。

最後にひとつだけ欲を言えば「お兄ちゃんもう一度逢いたいよ」

平成二十年十月十六日

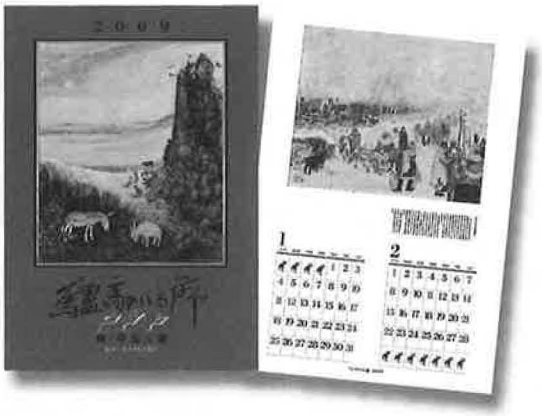
2009年カレンダー

「驢馬のいる所」

画・甲斐大策

注文受付中！

A2判（画・7点）定価：1500円（税、送料込み）



今年もカレンダーの販売が始まりました。今回のテーマは「驢馬」。現地で貴重な労働力として、また移動民たちの旅の友として、さらに穢れのない無垢で純粋な魂の象徴として愛される驢馬の姿を描いています。画は会報表紙画をご提供いただいている甲斐大策さんです。同封のハガキでふるってご注文ください（ご友人、知人へのプレゼントも承ります）。

アリアナ大地の心 13

振子

甲斐大策

世界の気候温暖化をどうしたものか、といいつつ車は走り、その売れ行きの悪さを温暖化の何倍も切実に憂える、我々ひとしく勝手なものである。

南北両極氷原の縮小、氷河の後退、白熊とペンギンの運命を案じつつ、ひねると湯が出る有難さ、我々自身に迫る危機として地球規模の現象を捉える程誰も成熟はしていない。

ヒンドゥークシの峰に残る雪形を眺めての雪占いの悲しい言葉を何度耳にしたことだろう。それも一九七〇年代だった。

夏の雪を語っていたのではない。秋から冬、新雪を迎え、それと谷に残る雪形をあわせ、春の水を占っていた。

「あの雪では、来年は十万人の赤ン坊が死ぬ。」

バーミヤーン北方の旧道に沿って生きる蒙古系ハザラの長老の言だった。その言葉についで必ず聞かされたのは、外国からの援助が一部の人々によって横流しされる、特定の民族のみがうるおう、という話だった。

旅するたびに耳にしたこれ等の話から三十余年、アフガニスタンでは何一つとして、人間が生きていく条件が好転した面はなく、自由、平和、民主の美しい響きさえ、それ等が欧米の都合で掲げられる時、日々、無辜の人々が生命を散らす現実があるのを、となえるみたいに我々は自らにいいきかせる必要がある。

元凶は、誰もが口にしたがらないが、明らかだろう。

無節操で独りよがりな欧米近代そのものである。有形無形を問わず、近代という振子を欧米の支点で強引に振りつづけた今日、その振子はさまざまな形で戻ってくる、そのことを知るべきだろう。

何から始めれば良いか、の問いには答がある。アフガニスタン、古名アリアナの地と人々を初ずは、もっと識るべきである。

●事務局便り

＊中村医師からの報告には、胸が熱くなった。

用水路工事も本水路に分水路、ガンベリー砂漠直前の難工事も着々と進み、自立定着村の外壁工事に防風林、防砂林の植林事業も滞りなく、さらにはマドラサ、寄宿舎、モスクも来春には完成するという。一〇〇人の職員と五〇〇人の作業員を一〇キロメートルのエリアの中で監督し、給料支払いを含めた諸事を視野に入れての大車輪である。迫り来る旱魃と寒波の前で、アフガニスタンでは数百万の人々が飢餓の巷にある。ぬくぬくと日本で暮らす身には実感できない危機感のなかで、中村先生が仁王立ちになっている姿だけが見える。自衛隊派遣を議論する政治家には、何を語っても実情は伝わらぬという苛立ちを感じながらも、参議院の外交防衛委員会では、「戦争どころではない。問題は、水と食料だ」と意見を述べるために帰国した。

「先生、とにかく無理せんで下さい。私も近いうちに現場に行きますから」

慌ただしく現地に戻る中村医師に言えた言葉は、それだけだった。

日本人ワーカーの引き揚げにより、現地では少なからず不安が広がったと思える。しかし、中村医師からのメールによると、現地職員・作業員共にPMS事業は自分たちの死活問題と捉え、志気は上がっているという。私達もねばり強い事業の継続によって、「現地への責任」を果たして行かねばならない。

＊伊藤君を偲ぶ写真展が故郷掛川を皮切りに始まった。伊藤君の生い立ちの写真、現地での活動風景、本人撮影の写真併せて五〇点が展示され、十一日間での総入場数は七六二四人であった。会場は予想以上の入場者数と熱気で、伊藤君の人柄と活動の実績が、幅広い人々に強いメッセージとなって刻印されたようである。

ペシャワール会としては、来年三月より全国で写真展を開いて行きます。開催要領については、事務局にお尋ね下さい。

ペ村から

深い悲しみに沈んだ気分で、日々の活動が進行していった。その我々を見守ってくれたのは、事務局に飾られた伊藤和也さんの笑顔の写真であり、彼が撮った菜の花畑に遊ぶ子ども達の写真であった。我々は、この写真たちに勇気と希望を与えられた。年が明けた三月の「アフガンに緑の大地を　伊藤和也追悼写真展」の準備を急いでいる。彼の未完の意志がより良く表現されるよう全力をあげて取り組んでいる。この写真展の作業を通して我々は、胸の奥深く彼の志を刻み込んでゆくだろう。ヒンズークシの山々に、やさしい雪が降ることを祈りながら。（R）

医者、中村哲 【3刷出来】1890円
用水路を拓く
アフガンの大地から
世界の虚構に挑む
●養老孟司氏絶賛　用水路建設事業の7年をつづった感動の記録

丸腰のボランティア
すべて現場から学んだ
中村哲編　【2刷】1890円

空爆と「復興」【2刷】1890円

辺境で診る　【3刷】1890円
辺境から見る
ダラエ・ヌールへの道
【3刷】2100円

医者 井戸を掘る　【10刷】1890円

医は国境を越えて　【6刷】2100円

ペシャワールにて　【8刷】1890円

聖愚者 甲斐大策の物語
1890円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　電話092(714)4838

アフガニスタンの診療所から
609円
筑摩書房　東京都台東区蔵前2-6-4　電話03(5687)2670

価格はすべて税込価格（税5%）です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号　TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2008年12月17日　No.98　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲　名誉会長　高松勇雄